

農機具が語る開拓の歴史

わがまち遺産

「土の館」(上富良野町)

ラベンダーの里の玄関口として知られるJR上富良野駅から車で約5分。大豆や小麦畑に囲まれた「土の館」(上富良野町)は、古今東西のトラクターや、北海道開拓で活躍した「プラウ」とよばれる農機具などを集めた「土の博物館」だ。道内をはじめ、日本と世界の農耕の歴史を学ぶことができる。



117年前の蒸気トラクターと田村政行館長=いずれも上富良野町

土の館は、農機具メーカー「スガノ農機」(本社・茨城県美浦村)がつくった私設の博物館。会社は1917年に開拓移民の故・菅野豊治さんが24歳のとき、上富良野村(現上富良野町)に開業した。博物館を立ち上げたのは、3代

目社長で次男の故・祥孝さんだ。

展示の目玉は、古今東西のトラクター72台を集めた館内の「トラクター博物館」だ。1902年に製造されたカナダ製の蒸気トラクターから、国産第一号のトラクターまで、貴重な機械がならぶ。そのほとんどが実際に農作業に使われ、道内の農家などから寄贈されたものだ。

最初は数台だけを展示する予定だったが、「スガノがトラクターを集めているらしい」と農家の間で口コミが広まり、大量のトラクターが集まった。当時のトラクターは非常に高価で、国産第一号のトラクターは1台57万円。当

時の農家の年間の売り上げに匹敵するという。

田村政行館長(67)は「使わなくなった古いトラクターでも『家宝』のように扱う農家は多い。それを寄贈してくれたいというのは、スガノに対して信頼があるからでしょう」と語る。



牛や馬に引かせて使う「プラウ」。人力より深く効率的に土を耕せる



スガノ農機の歩みは、北海道開拓の歴史と密接に関連している。同社の商品は、家畜やトラクターなどに引かせて土を耕す「プラウ」と呼ばれる農機具。日本では古来、クワなどを使う人力での農作業が主流だったが、北海道開拓をきっかけに、プラウの導入が進むことになる。北海道の広大な原野を人力だけで耕すのは困難だったからだ。

当初は海外製のプラウが使われていたが、やがて国産化が進んでいく。国産プラウ製造の先頭に立ったのが創業者の豊治さんだった。道内各地の土を採集し、火山灰用、粘土質用など、各地の土質に合わせたプラウを次々に開発した。高い品質が認められ、当時の道庁から「奨励農機具」として認定された。

プラウを使った農業は戦前、旧満州の開拓でも試みられた。政府からの大量の受注をさばくため、豊治さんは他の業者者に技術を無償で教えた。これがきっかけとなり、国内各地にプラウを使った近代的な農業が広まっていった。

土の館というだけあって、農機具にとどまらず、世界各国の農耕の歴史や、道内各地の土壌の断面標本などの展示もある。1926年の十勝岳の噴火に関する記録など、郷土史料として価値が高いものも多い。北海道遺産に選ばれたほか、日本機械学会が定める機械遺産にも認定されている。年に60回ほどのペースで、農家や農業高校の生徒向けの研修会も開いている。

田村館長は「食の安全に関心を持つ消費者は多いが、それを支える土のことまで考える人は少ない。自分たちが食べる物を育てる土について、ちょっとだけ考えてみて欲しい」と語った。(武田啓亮)